

平成 22 年 6 月 7 日現在

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007 ～ 2009

課題番号：19720214

研究課題名（和文） 縄文時代における、縄文原体からみた社会構造変化

研究課題名（英文） The changing of social structure in Jomon period viewed from the investigation of code-mark patterns on jomon potteries.

研究代表者 石田由紀子（ISHIDA YUKIKO）

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・特別研究員

研究者番号：40450936

研究成果の概要（和文）：縄文がもつ文様（表層性）と製作技法（基層性）という2面性を利用し、人間集団の動向と土器型式との関連性を西日本の縄文時代中期末～後期の土器資料から検討した。その結果、地域性やその変化、縄文原体の使い分け、磨消縄文手法確立による文様効果へのさらなる志向などを確認することができた。さらに土器型式と縄文との関わりについても検討を加え、型式と縄文原体とが連動する中期末から、連動しなくなる後期中津式期、そして再び連動する後期前葉福田K式へという動きを確認した。そして土器型式と縄文とが連動する背景には、人間集団の直接的な交流が関連すると結論づけた。今度、時期的・地域的にも広げ、列島規模で縄文原体の動向を追求することを目標としたい。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to read the trend of social structure of Jomon period viewed from cord impressions on Jomon potteries. Cord impressions have two properties; one is to take a part of pottery decoration and the other is, because cords are tools to make potteries, to connect to the technology of making potteries. By using these properties, I researched the trends of human population from the latest Middle Jomon to the early Late Jomon in western Japan. As a result, significant results like regional characteristics and that's changes, choosing cords as a situation, and much intention of decoration are revealed by focusing cord impressions. Furthermore, I investigated the connection between the types of Jomon potteries and cords. In conclusion, the background of interlocking types of potteries with cords is connected to direct relationships with human population.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	500,000	0	500,000
2008年度	400,000	120,000	520,000
2009年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	1,200,000	210,000	1,410,000

研究分野：人文科学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：縄文土器、縄文原体、地域性、土器型式、社会構造、磨消縄文、有文土器、無文土器

1. 研究開始当初の背景

「縄文時代」や「縄文土器」という言葉に体现されるように、縄文土器に施文された縄文はその時代の総称的意味合いをも担っている。本研究は、縄文土器の最大の特徴である縄文から当時の社会の動向を探るうとするものである。

そもそも縄文土器に施文された縄目文様が撚紐の回転押捺によるものと発見されたのは1931年、山内清男によってである。その後、山内は縄文の撚りの傾向を時期・地域を越えて網羅させ、「日本先史時代の縄の撚り方の癖」と題して表として公表している（山内清男『日本先史土器の縄紋』先史考古学会，1979。初出は1961年の学位論文、「日本先史土器の縄紋」）。

このような縄文の撚りの傾向を、縄文全時代を通して列島規模で概観する山内の試みは、土器型式の変遷や伝播を考える上でも非常に重要な研究ではあるが、その後の発展をあまりみていない。

もちろん、遺跡ごとや、特定の型式内での縄文の傾向や地域性について言及しているものは数多くあるが、型式を越えて地域的に縄文の撚りについて網羅したものは山内以来ほとんどみられない。

今回の研究はこういった背景をふまえ、文様モチーフではスムーズに変遷の追えるにもかかわらず、縄文の撚り方向では単節LRから単節RLへと逆転する、中期後葉から後期前葉にかけての西日本をフィールドに型式変化、時間的変化の中で縄文の撚りがどのように影響・変化するのか検討を加えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、縄文そのものから当時の社会の動向を読み取ることであり、具体的には以下の項目を達成することを念頭においた。

(1) 人間集団の動向の把握

縄文は文様の一構成を成すものであり、特に縄文後期以降盛行し列島規模で広がりを見せる磨消縄文手法は、無文部に対する縄文部として、縄文が文様効果に大きな役割を果たす。

その一方で、縄を撚る際には左右どちらから撚り始めるかということや、土器に施文する際にはどれくらいの太さでどういった撚りの縄を使うかといったことは、土器製作技術に大きく関わることである。

このように縄文には、文様に代表される表層性と、土器製作技法に代表されるような基

層性との両方を兼ね揃えている。この特性を利用して、地域性が細かいと言われている中期末から、後期初頭の中津式に代表されるような広域に分布する土器型式の成立と、人間集団の直接・間接的交流がどのように関連するのかを検討していきたい。

(2) 型式と縄文原体との関連性

一般的に型式と縄文原体との関連性は密であると考えられることが多い。実際、縄文時代を通して縄文の撚りの傾向を全国規模で網羅した山内清男は、ひとつの型式にひとつの撚り方向が対応すると考えていたようである（前述山内1979）。また、中期の鷹島式や船元式など、縄文原体の特徴そのものがその型式を規定しているものもある。本研究では、縄文原体を詳細に分析することによって、縄文と型式がどのように関わるのか検討する。

3. 研究の方法

本研究では、以下の(1)～(3)を軸に検討をおこない、それらを相互に検討することにより、縄文原体の様相について考察をおこなった。

(1) 時期設定

まず対象とする地域の土器編年の再整理をしたうえで、時期設定をおこなった。本研究では、データ集成をおこなう上で小破片も研究対象とするため、ひと目見てそれとわかるような明確な時期区分が必要である。このことをふまえ、中期後葉から後期初頭にかけての時期を以下の～期までに5期に時期区分し、分析を試みた。

期：中期後葉 北白川C式の1～3期

（磨消縄文技法確立以前）

期：中期最終末 北白川C式4期

（磨消縄文手法確立以後）

期：後期初頭 中津式成立期

期：後期前葉 中津式

期：後期前葉 福田K式

なお、これらの土器編年に関する詳細は本報告書の5.にある石田2008「中津・福田K式土器」および、石田2008「中津式から福田K式へ」で報告している。

(2) データ集成

主に以下のふたつの方法で、縄文原体のデータ集成をおこなった。これらの計測データは本報告書の5.に記載してある石田2008「中津式から福田K式へ」や2010「縄文原

体からみた西日本縄文後期初頭の社会構造変化」で公表している。詳細はこれらを参照していただきたい。

縄文原体の計測

縄文土器から縄文の太さを計測し、縄文原体の太さの変化を探る。

主に縄文時代中期後葉から後期前葉の西日本を中心にまとめた土器資料が出土した遺跡を抽出したうえで、現地にて縄文原体の撚り方向の観察および太さの計測をおこなった。太さの計測は条に直交するように2条分をミリ単位で計測し、観察した。

撚り方向のデータ集成

発掘調査報告書から、当該期の縄文の撚り方向のデータを集成し、西日本における縄文の撚り方向の地域性の抽出および、型式変化に伴う撚り方向の変化をみた。また、有文土器において縄文施文の土器がどれくらいの割合を占めるかということについてもデータ収集をおこなった。

(3) 他の土器属性との比較

縄文原体のほかにも、別の土器属性、特に従来から地域性が抽出しやすいといわれている粗製土器の器面調整について、データ収集をおこない、縄文原体の様相から抽出できた成果と比較検討をおこなった。

4. 研究成果

3で述べた研究方法により、以下のような成果が得られたその詳細は、5にある文献で公表している。

(1) 縄文の撚りの地域性とその変化

縄文の撚り方向の傾向やバリエーションを調べることで以下のような結果を得ることができた。

磨消縄文手法の確立と縄文の細密化

縄文原体の太さを計測することで、中期から後期までの太さの変化を確認することができた。

従来、縄文原体の細密化は中津式期に相当する 期に起きる現象として理解されてきた。しかしながら今回の調査の結果、中津式期よりも以前の 期に起きる現象と確認できた。

期は磨消縄文手法が導入される時期であり、磨消縄文手法の確立に伴って、文様効果をより高めるために縄文原体の細密化がおこなわれたと考えられる。

また、 期において、縄文の撚りの太さが西日本全体で近似する太さになることを確認した。次項で述べるが、 期は単節 R L の割合が圧倒的を占める時期でもあり、撚りだ

けでなく、太さをも規制する非常に強固な共通性が福田 K 式の分布圏内でみられることがわかった。

縄文の撚りの地域性とその変化

縄文の撚り方向と、有文土器において縄文を施文する割合についてデータを集成することによって、地域性を抽出することができた。ここでは、 ~ 期までの時期毎に言及する。

期：細やかな地域性がみられる段階。近畿地方では単節 L R が圧倒的に多く、縄文施文率も高く、縄文に対する強い規制がうかがわれる。その一方で瀬戸内地方では、縄文施文の割合も低く、単節 L R と単節 R L が半々の割合を占めることから縄文の撚り方向に関する規制は瀬戸内地方では希薄であったことがうかがえる。四国では、単節 L R が優勢で近畿地方と共通する一方、縄文施文率は 50% 程度と瀬戸内地方の様相と類似するなど、各地で様相が異なる。

期：細やかな地域性がみられるものの、 期では関係が希薄だった奈良と三重とが撚り方向で共通する部分が多くなるなど、隣接地域の様相との類似性がみられ、周囲との連帯性が強まる。

期： 期以来の地域性が保持されているものの、瀬戸内地方では縄文を施文する土器自体が激減する。

期：瀬戸内地方では 期に激減した縄文施文の土器が急増し、今度は単節 R L が主体となる。近畿地方では大阪以西で R L の割合が増え、徐々に瀬戸内との一体化がみられる。

期：西日本全体で単節 R L が圧倒的優位になる段階。ただし、中部地方では単節 L R の割合も一定量占める。瀬戸内地方では縄文を施文する割合がさらに増える一方で、これまで縄文施文する割合が高かった近畿地方で、縄文施文の割合が減少する。

縄文原体の使い分け

縄文は有文土器、無文土器どちらにも使用されるという特性を生かして、有文土器と無文土器に施文された縄文の撚りの方向と太さを計測し、比較した。ただし、無文土器に縄文が施文される時期・地域は限られており、近畿地方の および 期までである。

その結果、有文土器と無文土器とでは撚り方向では共通する一方で、縄文の太さに関しては違いを確認することができた。

すなわち、 期の段階では有文土器と無文土器とでは縄文の太さでは違いがみられなかったが、 期の磨消縄文手法確立後では有文土器の方が無文土器よりも細かい縄文原体を用いて施文をおこなっていることが判明した。このことは、 期の時点では有文土器と無文土器とでは縄文に関しては特に意識

して使い分けをしていなかったが、期以降、有文土器には細い原体を、無文土器には太い原体を意図的に用いる様相が確認できた。このことには、磨消縄文手法によって、より文様効果を高めるために有文土器には繊細な縄文原体を使用したためと思われる。

小結

以上の成果をもとに、縄文が期以降、文様としての役割を高めつつ、期における地域性が、後期以後の期・期においても継続する様相が看取できた。ただし期以降徐々に周辺地域との類似性を高めていく様相は認められる。

このことから、従来から斉一性が強いといわれている期の中津式期は、縄文からみる限りでは、広域的に広がる要因は大規模な人間集団の移動というよりはむしろ、周辺地域との関係を密にすることによって、情報伝達ネットワークが強固になったことが大きいと考えられる。

一方で、期における単節RLの圧倒的優勢および、縄文の太さの統一性は福田K式の分布圏において共通する様相であり、この段階こそ人間集団の大規模な移動を想定すべきだと考える。

したがって、期において瀬戸内において出現する単節RLの東進からみても、その移動の動きは西から東へとみることができよう。

(2) 他の土器属性との関連性

(1)で得られた成果をもとに、粗製土器の器面調整技法から抽出できる地域性と比較検討を試みた。

その結果、縄文の燃り方向から抽出できる地域性と合致する部分も多いものの、特に四国地方など、文様や燃り方向では近畿地方と近い様相を示す地域でも、粗製土器からみれば貝殻条痕を多用する瀬戸内地方と類似するなど、燃り方向とは違った傾向を看取できる地域もあった。

この要因のひとつとして、日常雑器である粗製土器の器面調整技法は、その土地環境に大きく左右されるためと考えられる。例えば、土器の調整を貝殻条痕でおこなっていた集団が、身近に貝殻を採集できない環境に移動すれば、別の工具で調整をおこなう可能性もあり得る。したがって、粗製土器の調整技法から抽出できる地域性は、土器製作流儀の共有する範囲を反映しているとはいえ、環境の変化をとまなう人間集団の移動合った場合は、それを追求するには不十分な部分もある。そういった人間集団の直接的・間接的な動向を把握するには、縄文の燃りなどが有効ということが確認できた。

(4) 縄文原体からわかること

縄文原体がもつ意味合いは、時期、地域によって当然異なると考えられる。しかしながら、縄文原体は文様の一部をなすこと、そして土器を製作する際の癖や流儀を反映しているという点では共通しているといえる。

本研究を通して、これまで密接に関連すると考えられがちだった縄文原体と土器型式との間にも、密接する時期としない時期とがあることが判明した。

その時期のひとつが文様モチーフの上ではスムーズに変化が追える中期から後期にかけてというのは注目すべきである。報告者は、縄文原体が土器製作集団の最も基層的な部分を表すという想定をもとに、文様モチーフの共通性がみられるものの、縄文原体では地域性がみられる期中津式期よりも、むしろ福田K式分布圏における強固な縄文原体の共通性がみられる期にこそ大規模な人間集団の移動があると考えた。

今回の研究では西日本を中心に広域に分布する磨消縄文の伝播にともなう縄文の細密化と、土器製作の流儀に起因する縄文の燃りの変化を確認できた。一見相対するふたつの現象の背景には、交易などの間接的交流による情報ネットワークの強化と、これを基盤とする人間集団の直接的移動とが背景にあることを捉えることができた。

このように縄文原体には、文様と製作技法との両方の観点から検討が可能である。このことは、これまで文様論と製作技法論という2項対立になりがちであった、縄文土器研究にあらたな視点を提供できると考えている。

(5) 今後の展望

本研究では、縄文原体の動向を型式を越えて追求することが目的であったが、今回は時期も中期末から後期前葉まで、地域も西日本という限られた範囲の研究にとどまってしまう。しかしながら、本来的にはこの研究を地域的にも時期的にも大きく広げてこそ意義のある研究だと思われる。

今後も、各地域・時期の縄文のデータ集積を継続し、最終的には縄文時代全時代をとおして、列島規模で縄文原体の動向を追求していきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

石田由紀子、縄目文様をよむ - 縄文時代後期の西日本を中心に -、日本の美術、第498号、査読無、2007、87-98

石田由紀子、中津・福田K式土器、総覧縄文土器、査読無、2008、634-641

石田由紀子、北白川C式から中津式へ、関西の縄文中期末土器 - 北白川C式とその周

辺 - 発表要旨集、査読無、2008、49 - 60

石田由紀子、吉野川流域の縄文遺跡、公開シンポジウム紀ノ川流域の縄文文化資料集、査読無、2009、27 - 36

石田由紀子、大官大寺出土の縄文土器(2)、奈良文化財研究所紀要、査読無、2010、掲載確定

石田由紀子、縄文原体からみた西日本縄文後期初頭の社会構造変化、関西縄文文化論集、査読無、2010、掲載確定

〔学会発表〕(計2件)

石田由紀子、北白川C式から中津式へ、関西の縄文中期末土器 - 北白川C式とその周辺 -、関西縄文文化研究会、2008年12月14日、奈良女子大学

石田由紀子、吉野川流域の縄文遺跡、財団法人和歌山県文化財センター、2009年11月7日、かつらぎ総合文化会館

6. 研究組織

(1) 研究代表者

石田 由紀子 (ISHIDA YUKIKO)

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・特別研究員

研究者番号：40450936